

# 田遊びの歴史



▲県内最古の古文書である笠原荘一宮文書

蛭ヶ谷の田遊びの起源は、正月に寺院などで僧侶が天下泰平や五穀豊稔を祈願する「修正会」と捉えられている。県内最古の古文書である笠原荘一宮文書（元弘3年1333年＝御前崎中山家所蔵）に「田遊び」という言葉が記述されていることから（\*写真の赤枠部分）、田遊びは14世紀前半以前には東遠江地域にもたらされたことが判明している。

御前崎市に近い蛭ヶ谷の田遊びも、同様に鎌倉・室町時代には行われていたと考えられている。



【写真上】杉の束で作られた「ほた小僧」を新葉で結わられた縄に結び、輪の中央に入った親方が大声でせりふを唱え、綱を持つ若者が掛け声を発し、ぐるぐると綱を引き回し、神々と呼ぶ1番目の演目の「ほた引き」。

【写真右】三人の田打ち衆が本殿正面に立ち、親方が声高にせりふを言い、担いだくわで本殿の石段を田に見たてて行う「田打ち」。その後、豊作に繋がる御馳走である高盛飯が彼らの前に置かれ、昼食となる。



# 地域で継承

# 蛭ヶ谷の田遊びが国重要無形民俗文化財に指定

国は3月8日、蛭ヶ谷の田遊びを国重要無形民俗文化財に指定した。豊作祈願の神事を伴奏なく厳かに行うことは、類例がなく呪術性を感じ、学術的にも非常に重要であるとされた。また、地区の青年男子によって、旧来どおり祭礼が行われ、今後も継承していくという姿勢も高く評価された。今回の指定で、県内では9件目の重要無形民俗文化財となった。



「本刀振り」の真似をして木刀で四方切りをする「もどき」

## 蛭ヶ谷の田遊びは、毎年2月11日の夕刻から夜更けにかけて、蛭児神社の境内で稲作の過程を模倣的に演じ、豊作や子孫繁栄などを祈願する民俗芸能。同地区の青年男子（20歳～39歳）十数人が約5時間半かけて、17演目21役を演じる。神々と呼び寄せる「ほた引き」や太刀を使って空間を結界する「本刀振り」などの前半の儀礼的な演目と、「田打ち」や「稲刈り」など農耕作業を模した後半の演目で構成。今年も地元住民や市内外からの見物客、報道陣など約400人が詰めかけた。

## 祭りは昭和41年に旧相良町の、56年には県の無形民俗文化財に指定された。平成20年から21年にかけて、本市松本出身の野本近義大学名誉教授を委員長とする「蛭ヶ谷の田遊び調査委員会」が、調査報告書を作成した。平成24年1月20日、文化財指定を協議する、国の文化審議会が文部科学大臣に指定を答申し、国の文化財となることが決定。この決定を受け、市ではのほり旗50枚と立て看板2枚を作成。市長が「地区の皆さんが継承してきた民俗芸能が評価されたことは大変うれしく、市の誇り」とあいさ

つし、同地区に贈った。今年、田遊びを視察した吉田純子文化庁調査官は「青年たちは文化財だから実施しているのではなく、継続していく意義を真に持っている。貴重な文化のため、絶やさず続けてほしい」と話した。今後、地区では保存会を設立するなど、団結して貴重な文化を末永く継承していく。

### 世代間の交流により重要な文化が根付いている

豊作祈願の祭りである田遊びは、米文化を持つ日本人として、稲作のありがたさを見直すうえで重要。田の神が子どもの姿で現れたとされる「ほた小僧」や高盛飯、楽器を一切使わず独特の掛け声や歌で行われるなど、蛭ヶ谷の田遊びの特徴は、予祝（豊作を祈願しあらかじめ祝福する）芸能としての完成度の高さと個性にあります。地域で代々継承され700年以上も継続されていることは、世代間の交流が確立されていることの証で、蛭ヶ谷地区に貴重かつ重要な文化が根付いている証拠だと言えます。



調査委員会委員長 近畿大学名誉教授 野本 寛一氏

### インタビュー

田遊びを継承している今年の青年代表と最年少の青年に話を聞きました

#### 今後も変わらずに続けていく

少子高齢化により以前に比べると、約半分の人数で一人二役などで実施しています。しかし、若者と交流できる場もあるので、つながりができて地域としての絆が生まれていると思います。皆真剣に取り組んでいるので、今回の指定は大変励みになり、今後も変わらずに続けていくことが大切だと感じます。



年番の親方 村松 公夫さん

\*年番…青年の代表

#### 先輩と交流できることがうれしい

昨年初めて参加しましたが、せりふや動きなどが難しかったのですが、先輩や地区の人たちなどが丁寧に教えてくれたことと、子どものころから田遊びをずっと見てきたので、覚えることができました。田遊びを通して、地区の先輩と仲良く交流できることがうれしいです。今後もずっと続けていきたいです。



最年少の青年 長谷川 元紀さん

\*親方…年番の中での代表者